る。

以上の点より成立は①療治之大概集②選鍼三要集③医学節要集の順で、時期的にも幅があるものと考察する。

（筑波大学理療科教員養成施設）

24 「杉山三部書」の研究（その2）

―経穴と補瀉―

○中島　史・北村　智・長岡靖彦・長尾栄一

はじめに

〈杉山三部書〉は、江戸時代に杉山和一が鍼灸教育を目的として書かれたといわれている。そこで、我々は鍼灸の教科書としての、そして現代鍼術に大きな影響を及ぼした〈三部書〉の経穴および補瀉について検討した。

（1）経穴について

全体として『療治之大概集』の経穴部位は、その多くが中国文献の一部分を活用した記載である。例えば『十四経発揮』と比較すると、青霊「在肘上三寸挙臂之取」が「肘上三寸」、地機「在膝下五寸」が「膝ノ下五寸」などである。また『療治之大概集』独特の表現も多く、大椎「肩ト等シキ節ノ下」、雲門「乳ノ上五寸脇エ二寸」、欠盆「喉ノ

下両ノ陥」などがそうであり、比較的分かりやすく書かれている。

しかし、これらの独特の表現も『選鍼三要集』では、大椎「第一椎上」、雲門「璇璣旁六寸」、欠盆「気舎後大骨陥中」などとなっている。

以上のことより、『療治之大概集』では、初心者でもかなり分かりやすく書かれており、『選鍼三要集』においても『療治之大概要集』に比べ専門的ではあるが、短く端的にまとめられているといえる。これは、教生に対する記憶の便を和一が考えたからであろう。また、『療治之大概集』は、記載経穴の数も少ないことからも教生の入門書として用いられ、『選鍼三要集』は、ある程度熟練した教生の教科書として用いられたと考えられる。

また、『療治之大概要集』で正穴として記載されている督兪、気海兪、関元兪については、照合した中では『太平聖恵方』『鍼灸資生経』『医学入門』『鍼灸大成』に記載がみられ、奇穴として穴位まで記載されている子宮穴は『医学綱目』に記載がみられた。この事と書誌学的考察とを考え併せると、『療治之大概集』は、経穴の面でも明代の影響をうけているものと考えられる。

（2）補瀉について

杉山和一が補瀉を重要視していたことは、『療治之大概集』『選鍼三要集』の巻頭に補瀉を置いていることからも伺うことができる。

補瀉法としては、『療治之大概集』では、呼吸出内・開闔の手法を、『選鍼三要集』では、『霊枢』［九鍼十二原篇第一］・『難経』［七十八難］を引用し、迎随・左右・呼吸出内・開闔の手法を取り上げている。〈三部書〉とこれに前後する文献とを比較すると、手法の数は多くはないが簡潔にまとめられている。また、左右の補瀉については、『選鍼三要集』［論鍼灸要穴］の所で「予嘗思、主腹不知要穴、或左右不分補瀉、或失穴処不取鍼。嗚呼、不思甚哉。」と述べており、いかに和一が左右の補瀉を重視していたかが分かる。

これらの補瀉に対する見解は『選鍼三要集』［論補瀉迎随第一］の中によく現れている。更に、「師曰」に始まる文を記載していることは注目に値する。それらは次の三つである。

①「師曰、左右可分補瀉。欲瀉左者、当将大指内之、欲瀉右者、将大指当外。反此者謂補也。」
②「師曰、補瀉者、以迎随可主也。迎而刺之曰瀉、随而刺之曰補。」
③「師常曰、人身血気之往来、経絡之流貫、或補陰、可以配陽。或因此、可以攻彼。不過欲和其陰陽、欲調其血気、使無偏勝、而得其平。是所謂補瀉也。」

このことは師である入江豊明の教え、つまり入江流の影響を多分に受けて和一の補瀉法が完成したものと思われる。

（筑波大学理療科教員養成施設）

25 『素問研』について

宮川浩也

近年、稲葉通達著の『素問研』（全八巻、一冊）が影印刊行された（オリエント出版社、一九八七年）。著者およびその書誌については刊行時に附された解説に詳しい。しかし、その成立（一八世紀後半と考えられていている）や著者の稲葉通達について（生卒など）はいまのところ詳細には判明していない。

この著は解説者に「『素問識』にまさるとも劣らない」と評価された。『素問』の学理を明らかにする上で欠くべからざる注釈として、また江戸中期の『内経』学を窺う上でも重要な位置を占めているのである。しかし通覧してみると、略字・俗字、空白や全く読めない字が散見し、書き入れなどがあり、『素問研』の原貌にほど遠い感がある。